

中舌母音の音響分析について

—奄美大島の古仁屋の場合—

県立広島女子大学名誉教授 今石元久

I

舌の中間的調音について服部四郎氏は“(1)中舌面が高口蓋に向かってもちあがる、(2)舌全体が扁平の形である、(3)前舌面と奥舌面が同時にもちあがり、中舌面がくぼむ、”と述べて“(3)のような調音は全然不可能ではないにしても、實在の母音に見出されるか否かは甚だ疑問だ”(服部四郎著『音聲學』114-115頁参照)と述べていた。ところが、じつは、(3)が奄美諸島における重要な研究課題であると、私は思う。

服部四郎氏は、舌の複雑な動態には注目しなかったのである。先行子音における空間で生成する微細なきこえ(sonority)が独自色に寄与すると考えたのであろう。服部四郎氏は“ただ(3)のような調音”というように、ごくごく簡単に遣り過ぎるのであった。今より以前(—服部四郎氏存命のころ)はまだパソコンや分析ソフトが日常的に普及していなかったので、実験的な“不可解さ”はさほど目立つことがなかった。

II

老年男子義永秀親氏は60歳半ば、奄美大島瀬戸内町古仁屋に居住し、瀬戸内町の文化協会会長であった。その後、瀬戸内町の町長に就任した。最近(2017年)逝去されたが、私は、30年来、まるで親戚のようなお付き合いをさせていただいた。義永秀親氏は理想のインフォーマントであった。とても陽気で万般にわたり物知りであった。とにかく、みんなに好かれるスカッとした性格であった。

話題はちょっとそれるが、米沢登美子著『複雑さを科学する』(岩波書店、1995年)はたいへんわかりやすい。この本は方言研究者、みんなにすすめてほしい。“カオスの思考”により、ことばの訛りを科学するよう推奨する。

実地調査は、はじめ、1986年7月24日午前8時頃であった。私は、義永秀親氏のお宅をはじめて訪問して、古仁屋独特の発音を習った。まず、調査語「手」の特色であった。自ら声を出して、必死にマスターしようとした。

服部四郎氏の調査場所は狭い大島海峡の対岸の加計呂麻島の諸鈍であった。加計呂麻島のここも瀬戸内町である。「諸鈍はちょっと古い」と言う人がいたが、毎日通って、諸鈍の郵便局に勤めていた渡哲一氏は「そんなに違ったことばはない」とおっしゃった。服部四郎氏は諸鈍のインフォーマント、釜久正氏(加計呂麻島きつての旧家の出身、旧家は今では離散している。)をたよりにした。諸鈍は(諸鈍は古仁屋とは大島海峡をはさんだ対岸の向き合う生間から詳しくいえば、さらに山越えしたところにある。)加計呂麻島の南端である。私も諸鈍へ行ったことがあったが、特にディオゴの並木は琉球王朝時代の交流の目印だった。

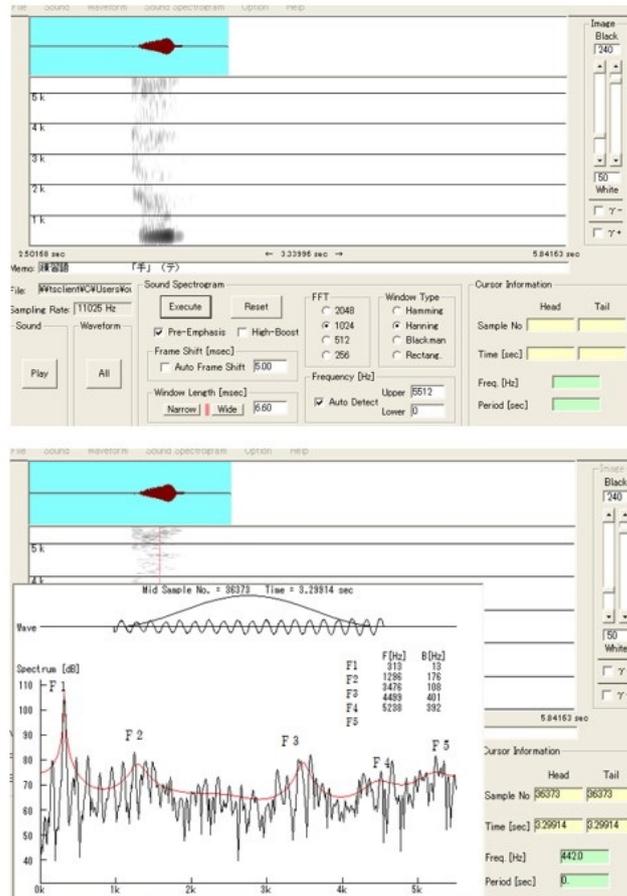
私の「調査と音声分析」は古仁屋であった。以下、間接的に、服部四郎氏の行った諸鈍の様子をうかがう、私流の“対比型の音響分析”である。

私は老年男性、“義永秀親氏”というかつこうのインフォーマントに出会った。“古仁屋はか

つて服部四郎氏のおこなった調査地、諸鈍に近い。”古仁屋は、古さを残しつつも、大島の南の地域に位置して万般、南部の中心地である。

●義永秀親氏の場合

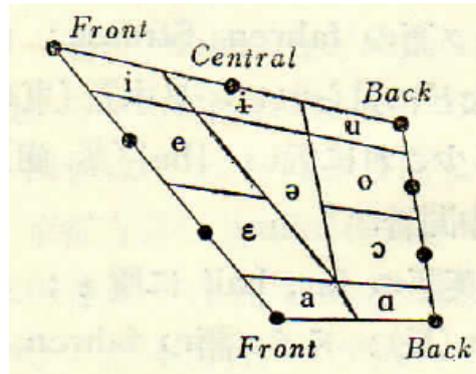
「手」の発音（義永秀親氏の手本）



奄美地域の「中舌母音」について、服部四郎氏も、たぶん、この発音行為から入ったのであろう。（私はいきなり難しい大問題に首を突っ込んだ。）

当時(1980年代)、今のようなコンピューターによる高度な情報処理がまったくなかった。察するに、服部四郎氏は、旧のスタイルである調音運動本位に観察していて「イやウの中間音」という二次元上での正中線のみが念頭にあったと思う。（たとえば Jones のように）二次元の“不等四辺形”の図上にターゲットをマークしていた。しかも、それは「イ」と「ウ」の中間でなく、むしろ「イ」にかなり近い。（私はむしろ、「ウ」に近いと思うが。）

『音聲學』7.3 母音の分類のところや、『日本語の系統』（岩波書店・1983年）56頁をごらんいただきたい。服部四郎氏がいう[i]は下図のごとく「[i][e][i]三母音の領域に會する點附近」であるが、『日本語の系統』285頁では、「奄美の大島や徳之島では「[t][d]などの後には両者の中間母音が現れるから、これらすべての母音は同一の母音音素*ɿ*（記号はこれでなければならないということはない。印刷の便宜を考え、簡略に従うならば、*ɿ*を用いてもよい。）に該当すると解釈すべきものとする。」と述べていた。



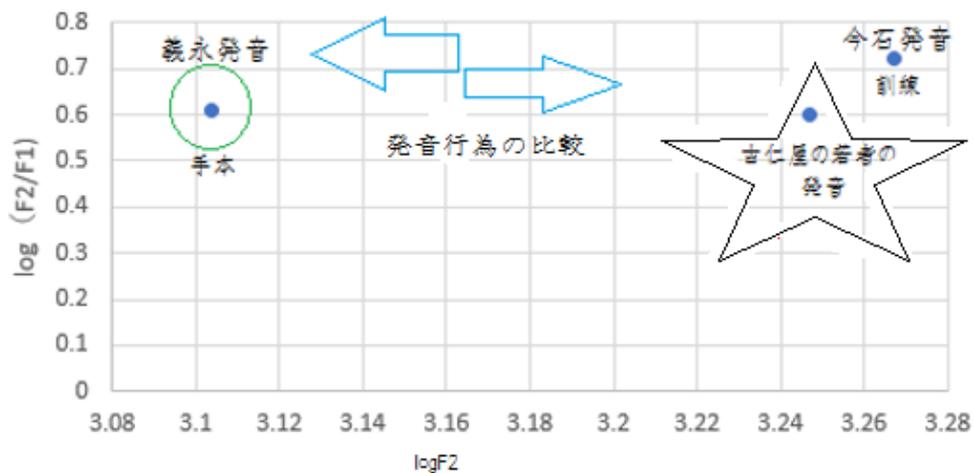
共通語の「エ」母音に対する「すべての母音は同一の母音音素*/ɨ/*に該当すると解釈すべきものと考え。」と、服部四郎氏の中はごじゃごじゃしていたようであったと、私は推察いたすのであった。（—おそらく、服部四郎氏は地元の若い世代も老年世代も中舌化は区別しないで、一括、図上に、いきなり、音韻論風に位置づけたのではなかろうか。）

次、私なりに客観的に提示する。たとえば、対岸の古仁屋における老年の義永秀親氏発音のスペクトル分析は先の通りであるが、ひと目で、分かりやすく拡大しておこう。

すなわち、誰でもわかりやすいようにしてみようと思う。（私なりに客観的に提示」とは、従来の比較言語学において“単純化という省略の芽”を胎蔵・養育していた”という意味が際立ち、それは誰もがすぐ分かることであろう。変化、変遷の“芽を胎蔵的に養育していた”という箇所こそ「私・今石の最重要箇所」とお考え下さい。「なんだ、いわゆる世代差か」というように、とりあえず、それに近い発音状態であろうと見てくださっても、一向に構わないのである。）

客観的な対比

●「手」の中舌母音に関する発音



私は、出雲や津軽で訓練した力のない扁平にした舌を高口蓋に近づけたのだった。

観察は、舌の前後もしくは上下の二次元的運動に限定した位置づけで言えば、老年男性の義永秀親発音も今石発音や古仁屋の若者の発音と同じであろう。客観的な詳細は上図の比較のとおりである。

III

「中舌母音的なわたり音が生ずる」とは、いったい何であろうか。

最近のこと、私はパソコンによる「音声録聞見 for Windows」を操作していて、前舌の中ほどあたりを、偶然、ちょっと緊張させた。その調音を、私はパソコンに取り込んだ。スペクトル分析を試みた。母音部の F2 周波数がグンと下がったのではないか。私は、とても、びっくりした。

「謎が解けた!」、これは、「服部四郎氏の思惟——仮説を吹っ飛ばす立派な音響分析結果!」。

“F2 は調音風の服部四郎氏に対して、まことに、現実そのもの。実地のフォルマント周波数の様相に、ぴったり”。

私は“なるほど、なるほど”と、われながら大きく頷き、すぐさま、実相についてさかんに音響分析を繰り返した。冷静に、何度も何度も、私の口で、高口蓋あたりでの舌の“くぼみ”を繰り返し、発音した。

そして、“服部四郎氏が意義素の弁別のことを、“F1・F2 のプラスマイナスとか明暗などで判定していたこと”を思い出した。“服部四郎氏の論述の非科学を非難したい”衝動を覚えた。

『日本語の系統』286 頁の「一体軟口蓋音の[k][g]と非口蓋化的唇音の[p][b][m]とは、持続部（と出わり）において舌の口蓋との間に広い空洞ができ、出わりの破裂音に暗い音色を与えるのに対し[t][d][n]の場合にはこの空洞が狭く、破裂音に明るい音色を与える。」とあった。服部四郎・山本謙吾・小橋豊・藤村靖「日本語の母音」『小林理学研究所報告』7-1 も拝見した。

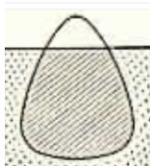
ここはどう理解したらよいかである。私は、この論述は“史的解釈の適用・もしくは不適用”と思うが、服部四郎氏は一貫して、“母音の広狭が明暗をもたらすのみ”と主張している。

服部四郎氏の心の内はわからないが、“ともあれ、大きな隔たり・ギャップはこのあたりだ”、と私は興奮した。と同時に、服部四郎氏自身、仮説的に“わたり”と称する独自の（——主観的）思惟は危ない。

『日本語の系統』は、わが国における、いわゆる比較言語学の書物というのであろうか。というよりも、あまりにも西欧的に“子音の調音”へ傾斜しすぎるのではないかと思う。

<<補遺>>

1



『言語学の方法』第1図

「氷山のたとえなし」は構造主義思想を象徴する。それは、“構造主義の反人間主義という一つの特徴があらわれる。”（山崎正一・田島節夫）と私もそう思う。服部四郎氏はソシュールと同じように“言語構造は目に見ることができないが、すべての言語現象まできちんとコントロールする”と音韻論的に類推したと思われる。しかし、“目に見ることができない”そういうところは、言語のとても重要な主体性が見え隠れしているのではなかろうか。

音声情報を処理する者は、何度でも実地へ出かけて、社会習慣や生活実態などをいろいろ詳細にかつ科学的に観察していただきたい。一度だけの直感や一度だけの調音的思惟では、客観的な全面的な音声情報処理とは言えない。

2 服部四郎氏は/ji/もしくは/ji/が存在し得えたと思っていたのであろう。『日本語の系統』

284 頁「/ɹ/と/jɹ/の対立」という仮定は危ない。

3 j・・・「小文字のJ」(Lower-case J)について

Jones は、基本母音の i は「舌ができるだけ上へ、前へ」という。その限界を超えると摩擦を伴う j という音質であると説く。その上、日本語の長い歴史において、「あめつち」「たみに」に“えのえを”と「え」が二つあらわれる。これらにより、ア行の/e/とヤ行の/je/が 10 世紀はじめまで存在していたと、国語史家はいう。服部四郎氏は、たぶん（以下は、あくまでも私の推測であるが）/jɹ/が存在し得たと見ても音韻体系上矛盾はないと考えたのであろう。

4 古仁屋で何度も調査してみたが、たとえば調査語「目」は、(服部四郎氏は「前寄りの中舌母音」とか「張唇中舌狭母音」(『音聲學』)などと称して、イのような、前舌に近いところの中舌母音と押しなべて言うが、実地精査の結果、じつは「どうかな」と疑問を感じるのである。私だけでなく、地元の人々もそうであった。どうやら、服部四郎氏と私たちは決定的に違っていたのではなからうか。服部四郎氏は、本州も琉球も/ɹ/とか/jɹ/とかなどと、つまり同一の記号を与えていた。(“中舌母音”というくくりで本州と琉球を同じように、観念的に観察していたのではないか。)再び言うが、服部四郎氏の「わたり音」という“仮説”は、一般の方々にもわかりやすくお示しいただきたい。

5 時枝誠記氏は『国語学への道』で下記のように述べている。

自然科学における物質構造論への類推において研究されて来たのであるが、ここにおいて、文法学は、絵画・音楽のやうな文化現象の研究と同様に、常に、統一体としての全体を問題にすべきこととなったのである。

私は、「文法学」という箇所を“音声学”という言葉に置き換えて、ゆくゆくは、いかにも 21 世紀にふさわしい学問を樹立したい。が、高いレベルに達する前、服部四郎氏の説く音韻的な解釈風の、“わたり”という抽象の仮説を設けないで、あくまでも“実地の音声”に従うのが筋道である。

近年、コンピューターの発達による高度情報処理の時代が到来した。そして、音声学の方へ“飛躍”が期待される。旧来の音韻論の仕方にこだわったワンクッションをおく、回り道のように説くことが、ほんとうに正しいのかどうか。実際の音声処理も、“わたり”というワンクッションが必要か、どうか。私は、庶民の生活現場を、「これでもか。これでもか。」と、もっぱら潜らなくてはいけないだろうと思う。庶民の生活現場は想像以上に根深いのであった。私は、時々、一般言語学的にあたりをキョロキョロ見渡すだけである。

“回り道”の探求も場合によっては、もちろん重要であろう。現実の日常生活において、中本正智氏をあれこれと批判しているのではない。逆に、中本正智氏は、こうして音声全般について考えるきっかけをお与えくださったのである。

《主な参考文献》

- 橋本進吉著『國語音韻の研究』岩波書店、1950 年
橋本進吉著『國語音韻史』岩波書店、1966 年
服部四郎著『音聲學』岩波書店、1951 年
服部四郎著『日本語の系統』岩波書店、1959 年
服部四郎著『言語学の方法』岩波書店、1960 年

服部四郎著『音韻論と正書法』大修館書店、新版 1979 年

服部四郎著『音声学 カセットテープ、同テキスト付』岩波書店、1984 年

中本正智著『日本列島言語史の研究』大修館、1990 年

前川喜久雄著「物理学が言語に出会った話」『窮理』第 6 号・第 7 号、2017 年